
志郎と怜子

蒼幻α

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

志郎と怜子

【Nコード】

N6178V

【作者名】

蒼幻α

【あらすじ】

ボーイミーツガールものと云えるかな……。 (注…ご都合主義で進んでいきます)

怜子嬢

夕立がすぎたばかりの庭は、草花の明るいグリーンが志郎の目を刺すように映え、ひんやりした清涼感が肌に迫ってくる。ぽたりぽたりと葉叢から落ちる雫は、射しこむ残照を受けて、刹那、きらりと輝いて弾ける。その弾けた先のどこかで蛙の鳴いているのがまた風情である。

志郎は隣家の二階に目を向けた。窓の向こうは近所でも評判の怜子という令嬢の部屋になっていた。カーテンが引かれてあるが全面ではなく、端のほうが見えている。志郎はそこをめがけて視線を滑らせた。

（いる——）と志郎は心をときめかせる。

志郎は怜子という令嬢のことを恋慕していた。せつないほど、胸が張り裂けるほどに想っているが、近所の噂では彼女には付き合っている男性があるとのことである。だが、志郎は自分の想いを諦めることができず、いつもこの庭から怜子の部屋を見上げているのである。

志郎は窓の向こうに怜子のいる気配を感じとった。

どうということはない。恋する青年の直観である。かれにとって、それが誰であるかは問題でなかった。極端な話、誰も居なくてもよかった。ただ自分の感じられる範囲に彼女がいると思えることが重要であったのだ。

カナカナカナカナとヒグラシが鳴いている。雨の霽ったあとでもあり、いつもの暑苦しさはない。風が吹きこんでくる。梢がゆさゆさと揺れ、その都度、水滴が落ちてくる。陽光はだんだん力を失くしていく。夜があらゆる場所に忍び入り、すべてを闇色に染めていく。

志郎はなおも庭に留まっていた。

かれは背後に人の気配を感じとった。美鈴である。まだ四十歳の

若い母親で、志郎を産んだのは二十二歳のときだった。つまり志郎は十八歳、都内の大学に通う学生であった。

「また怜子ちゃんの部屋を覗いたのね？」

美鈴は唾棄するように云い捨てた。

志郎は母にそう云われるのが一番こたえた。若くして夫——つまり志郎にとっての父親——を失くし、女手ひとつでここまで育ててくれたのである。が、志郎が隣の怜子のことを少なからず想っていることを知り、それに反対するような雰囲気を見せて、いつも叱ってくるのである。志郎はそれを鬱陶しいと思っていたが、口には出さなかった。それにはいつも「はいはい」とごまかすのであったが、今日はどこことなく虫の居所がわるくて、そんなふうに戻すことができなかった。

「人が誰を想おうが勝手だろう！」

志郎は語気を荒らげて云った。

美鈴はひるんだ。が、すぐに気持ちを盛りあげて云い返してきた。

「この軟弱ものが！」近所にも響きそうな大きな声だった。

「ちよつと……声が大きいって」志郎はなだめる。

「いいから、もうここから離れなさい。閉めないと虫が入ってくるから——」美鈴は志郎にきつい視線を向けた。

志郎はそれ以上口答えしてもなんの得にもならないことを悟って、云われた通りにする。縁側から客間を通ってリビングに向かい、ソファに腰をおろす。

しばらくして戻ってきた美鈴は、志郎の顔を見るなり、ほ——っと息をついて、首を振った。「蓼食う虫も好きずきね」ぼそりと云う。

「うん？　どういうことだよ」志郎は訊ねた。

「知らないの？　怜子ちゃんのこと近所で噂になってるのよ」

志郎は美鈴の話に興味をひかれて、それに聴きいった。

噂

美鈴の話はこんなものだった。

怜子は裕福な家庭の御曹司とすでに好い仲になっているというのである。もちろん、この近所には怜子のファンとも云える人物が複数存在していて、志郎もそのなかのひとりであったが、怜子のことを高嶺の花と見ているむきが多くて、彼も同じように、彼女のことを手の届かないところに存在している一輪の花と見ていたのである。その可憐な怜子のことを想うばかりか、実際にその肌に手を伸ばして、淫している人間がいると云う事実の暴力性。

志郎は後頭部をがつんと殴られたような衝撃を受けた。

美鈴の言葉の裏には、息子のことを存在すら認めていないのである。ろう女にうつつを抜かすことは、まったく甲斐のないことであるとの思いを打ち明け、そして、息子に別の世界を見てほしいとの思いがあるようだった。

「怜子さんはそういう人だから、あまり深入りしない方がいいと思うのよ」美鈴はきつちり云った。「さあ、お風呂の準備ができてから、先に入って頂戴。わたしは夕食作りをするから」

「うん」志郎はそう返事して、着替えをとり自分の部屋に戻った。

「怜子は美しい。怜子は可愛い。怜子は凛々しい。怜子は――」

志郎は湯船でそんなことを口にしながら、妄想を掻きたてた。

「何ができる？　まわりから反対されて、それでもこの恋を貫き通すべきか、否か？」かれは肩をすくめた。

風呂からあがると、美鈴は夕食を作り上げて、一休みしていた。夕方の情報番組を見て、アイステイーを飲んでいる。いつものティーバッグのものだと志郎は直感する。リプトンのイエローラベル。もうすこしいいもの、たとえばトワイニングなんかを飲めばいいのにと思っていたが、美鈴はお金もつたいないと云って、安いものですまそうと考えるたちだ。テーブルに置かれたタンブラーの氷が

くいつとまわって、カランと音をさせる。夏らしい響きである。エアコンはつけず、扇風機が回っている。風呂上がりの志郎には、部屋の中は暑く感じられるほどだった。節電の影響がこんなところにも出ている。

テレビは夏の海岸の様子を映している。

中国のなんとかいいう浜辺に、藻が大量に発生して、海の中までびっしり占領されている光景が映されていた。藻はなんのために大量発生したのか、という原因究明を行っているところだった。子供がその藻の浮遊する緑いろの海を黙々と泳いでいるシーンが大写しになる。

涼しさを通り越して、グロテスクな印象すら受ける景色だった。

志郎は想像した。あんな藻がいっぱいの海で泳がされたら、きつとトラウマになって、それ以降、海で泳ぐことができなくなってしまうんじゃないか、と。怜子のこと脳裏をよぎった。怜子の水着姿……おれは高校生かというくらい、うぶで純情なさかりのつき方をする自分に苦笑を禁じ得ない志郎だった。怜子の胸のふくらみや、秘部のしめりけ、そんなものを考えて、自分のものを硬くしてしまう習性に、呪わしい気持ちすら覚えて、すべてを放擲したくなる。

「わたしもお風呂にいつてくるから、あがったら御飯にしようか」美鈴が云った。

「ああ」と志郎は告げる。

窓の外につるした風鈴が、ちりーんちりーんと、か細く鳴っている。もう外は闇に包まれていて、カーテンをきっちりしめていた。リビングの空間だけが闇の中にぽっかり浮かぶ方形の光を持っている気がする。

志郎は、ほーっと息をはいた。

通過点

志郎が怜子とぼったり出くわしたのは、それから数日経った休日の昼間だった。志郎はコンビニに軽食を買いに行き、その帰り道、怜子が向こうから歩いてくるのを見たのである。珍しく怜子は誰もつれず、一人で歩いていった。とはいえ、顔をしっかり見たわけではなく、日差しの強い昼の外出で、日傘をさして歩いているのを見て、その首から下の見えている部分だけを見て、志郎は、それが怜子であることを知ったのであった。

怜子は志郎のほうへ近づいてくる。

志郎は怜子をじっと見た。

首元のレースの襟の白さは、ブルー系のワンピースに映えていた。日傘を握る手の指は細く、また白く、透き通るようであった。ワンピースの裾からのぞく足はしなやかそうで、とても細く、ふれれば汚してしまいそうなそんな清潔感をもっていた。

志郎は話しかけるつもりこそなかったものの、一箇所に立ち止まって怜子のほうを覗いていたので、いやでも彼女の注意を惹くことになってしまった。

「どうしたんですか？」と彼女はおそろおそろ尋ねてきた。足は止まっていたし、また彼女が、小動物の臆病さを含んだ怯えを心中に覚えているのであろうことが意識された。

志郎はふいに彼女に話し掛けられたので、どう答えていいかわからなかった。

そんな様子の志郎を見て、怜子はますます怯えの表情を見せて日傘を傾け、志郎の顔をちらっと見た。

「あ、ああ、大丈夫です」と志郎は答えた。気が動転していたので、満足な受け答えはできなかった。なにが大丈夫なのか？　そもそも心配されるようなことはなにもしていなかったし、また、彼女に見とれていたなんて口が裂けても云うわけにはいかない。

志郎は苦笑するしかなかった。

その様子に怜子はくすつと笑った。

「あなた、柿崎さんのところの息子さんよね？」

怜子はきっぱりした口調でいった。その調子には、もう最前のような怯えの兆候は見えなかった。

「は、はい、柿崎志郎です」

「うん、やっぱり志郎くんだ……」

怜子は急に打ち解けたようになった。

「おれのこと知ってるんですか？」

「それはご近所さんだもの、いろいろと噂も耳に入ってくるし、それに――」

「うん？」 志郎は怜子の次の言葉を待った。

「この前、夕立のあった日、庭からわたしの部屋を見てなかった？」

「あ、ああ」 志郎は生返事をした。

「すぐに志郎くんだってわかったよ」 怜子はきっぱり云った。

志郎は穴があいたら入りたい気持ちだった。そんな風にすべて怜子に筒抜けだったんだということにさらなる恥ずかしさを覚えてしまったのである。志郎はあのととき、自分がどんなに間抜けな顔をしていただろうと、そのときのことを思い出そうとした。しかし、怜子の次の言葉は意外なものだった。

「志郎くん」と怜子。

「うん？」

「今度うちに遊びに来ない？」

突然のことに、志郎はどう返事していいかわからなかった。

戸惑い

怜子の招待をどう受け止めればいいのか、彼女とわかれて一人きりになってからも、しばらく考えがまとまらなかった。志郎は気を落ちつけて考えられなかった。それで頭の中で彼女の言葉を何度も何度も反芻することになる。『今度うちに遊びに来ない?』。彼女の言葉はまるでありがたい託宣のようにすら思えて、やがて志郎の心の中に歓喜の気持ちを生じさせた。

「怜子さんが、おれに遊びに来ないかって?」志郎はひとりごちた。徐々に嬉しさが胸を領するようになって、志郎は、やがて、その嬉しさが逆に気恥ずかしくなった。向かいの道に柴犬を散歩させている老夫婦が姿を見せる。顔がにやけていないか自信がなかった。気を抜くとすぐに表情がゆるんでだらしない顔になってしまう気がした。

老夫婦が通りすぎると、志郎はさらに誰かに出会うのを恐れて、すぐに家に戻ることにした。こそそと隠れるようにして道を歩くことが恥ずかしいことのように思えてくる。志郎は家の鍵を開けると、今日が土曜日であることを改めて認識して、そんな休日に母はどこへ行っているんだろうとそのことが気になった。母は外資系の企業につとめている。なにかのオペレーターらしいが詳しいことはわからない。志郎を生んだときに、それまで勤めていた会社をやめたそうだが、子育ての期間を終えていざ社会に復帰しようとしたときに、前の会社の知人が融通してくれて、いまの企業に入れたのであった。それから十数年、美鈴は着実に職務をこなし、いまもその企業でバリバリ働いているわけだった。

「母さん!」志郎は大きな声で母親を呼ぶが、返事はない。

これは完全に外へ出ているのだろう。母が行く先を告げずに出ていくのはいつものことだった。志郎は、まあいいさ、と思いこんだ。今度、怜子の家に行くときも、それをだしにすれば母も文句を云

えないだろう。

志郎はふっと笑んだ。そして、買って来た食べ物をテーブルの上に載せて、手を洗いに立った。洗面所で手と顔を洗ってさっぱりしてから食事に取りかかる。かれはおにぎりとサンドイッチを袋から取り出し、紙の容器に入った一〇五円のオレンジジュースをあけて飲み口にストローを差し込んだ。

「いただきます」と云って、最初にサンドイッチからあけにかかる。卵とツナとサラダのサンドイッチが一袋になっているものだった。志郎は卵から食べ始める。驚くほど美味しいと云う味ではない。

これくらいという基準をどうにか越えているレベルのうまさである。それでも三百円と云う値段を考えれば文句のない味付けである。街の一軒のみの専門的なパン屋というわけでもないのだから、本格的なものを求める客は、コンビニのサンドイッチなんか買わないにちがいない。もちろん、志郎もそう云う物を求める客ではないので、コンビニのサンドイッチで満足しているのだった。

サンドイッチを平らげ、あいまにオレンジジュースを飲み、それからツナマヨのおにぎりをあける。それも平らげてから、オレンジジュースの残りを飲んで、ほーっと息をつく。食物を摂取した影響で体感温度が二三度あがって、暑く感じられるので、机の上に置いてある団扇を手にしてぱたぱたとあおぐ。

「夏だねえ、暑いねえ」と誰に聴かせるでもなく、志郎は口から言葉を押しだした。「怜子さん……か……」志郎はぼそつと呟いた。（どんな服を着ていけばいいのか）志郎は心配した。

怜子の家は志郎の家とは格式が違う。普通の服装では完全に浮いてしまう。みすばらしくない、格調のある、整った服装をしなければならぬ。志郎は行く前から、あれこれ考えねばならなかった。

招待

志郎は緊張していた。悩んだ末、ポロシャツにチノパンという服装にした。ジャケットも考えたが、そこまできっちりしては逆に緊張を悟られる気がして、若干カジュアル気味、しかし崩さない方向でのカジュアルを狙って、この服装にしたのだった。

日曜日である。怜子の家族は家にいるかもしれない、という恐怖があった。

「来るなら日曜日にして頂戴」と云うのは、あのコンビニの近くで会ったときに怜子が云った言葉だった。どうして日曜日限定なのか志郎にはわからなかったが、しかし、それもなにか理由があるのだろうと思って、何も云わなかった。

母の美鈴には正直に、怜子の家に行つて来ると告げた。母の反応は冷淡だった。相手にされるものかというあなどりの感情がそこに渦巻いているように志郎には思えた。

志郎はそれには怒りを覚えなかった。自分でもそうではないかと感じていたせいである。母も本気にしていない、自分も本気にしていない、いや、本気にしたいところだが、いまいち現実感がない。怜子に招待されたこと自体、夢のなかでの出来事であったような気がして、いまいちのれない。そんなあやふやな感情を抱きながら、家の玄関を後にしたのだった。

怜子の家の門のベルを鳴らす。

インターホンがつながって、はい、という声がした。怜子の母親の声だとわかった。志郎は心に若干の落胆の気持ちを生じさせた。日曜日という限定であったから、今日は家族がまったくいないとか、そういうことの暗喩だったのだろうかと期待する気持ちがあつたからである。それなら、家で二人つきりになれて、もしかしたら、とてもいい思いができるのではないかと思っていた。そうではないのなら、どうして日曜日と怜子は期日を区切ってきたのか？ それ

が志郎の心中に疑問となって渦巻いた。

志郎にはもうひとつ懸念があった。それが最近、噂になっている、怜子が付き合っているという男の存在だった。どこかの財閥の御曹司であるという噂であったが、かれとの兼ね合いはどうなのか？付き合っているのなら、そんな怜子が、家に他の男を呼ぶことは問題にならないのか？しかし志郎は怜子の家に来た。もうベルを鳴らしてしまった。後戻りはきかない。

門のオートロックが解除され、それは中に入っても良いという合図だった。玄関で怜子が出迎えた。今日もまたちがった柄のワンピースだった。黄色と薄緑の水玉のワンピースである。服の袖からのびた白いしなやかな腕が、怜子の魅力をさらに引き立てているように見える。

「いらっしやい」怜子は花もほころぶような笑顔を見せた。

「う……うん」志郎は緊張した。そして気になっていることを訊ねた。「家の人いらっしやるんだね」

「そうよ」と怜子。こともなげな様子である。

「いったい、どういう目的でおれを呼んだの？」

怜子はほとんど考える間もなく、意見を述べた。「なんていうことではないわ。ただ懐かしかったから、あなたと話がしたかっただけなの。まあ、それだけが原因ってわけじゃないけどね。それはいいわ、とにかくあがって頂戴」

「う……うん」志郎は玄関をあがって、そのまま絨毯の上を歩き、怜子の部屋のある二階に通された。

志郎が夕立の日に縁側から庭越しに眺めていたあの部屋である。

部屋は淡いピンク色に彩られていた。志郎はこの部屋に入るのは初めてだった。心臓がばくばくと脈打った。

事情

「わたしのこと、どう思う？」

怜子は肩をすくめ、しなをつくるようにして訊ねてきた。

いま志郎はソファに座り、怜子は机の前の椅子に腰かけて向かい合っていた。

「どう思うか、だって？」志郎は心臓をばくばくさせた。

怜子はまっすぐな眼差しで志郎を見ていた。

「んー」志郎は云いよどむ。しかし意を決して云った。「魅力的な女性だと思いますよ」

「そう？」怜子は目をぱちっと開いて、志郎を見た。

「実はね、もうすぐわたしのかれがここに来るのよ。そのとき、嘘でもいいから、ちよつと演技してくれないかしら」

「演技？」

「そう」怜子は声をくぐもらせた。「実はね、そのかれ、わたしの他にも彼女をたくさんもってるような人なのよ。それがわかったのがつい最近のことで、それで、かれに思い知らせたいの。わたしだけを見ないのなら、こっちからふってしまおうってね」

「それは穏当じゃないな……」

「うん、でも癪じゃない？ そんなふうにな股、三股かけられて、泣き寝入りなんて」

「それでおれは何をすれば――？」

「わたしのいい相手として話を合わせてほしいの」怜子は目を伏せながら云った。

設定は多くなかったが、それでも怜子から、かれの前でどう振舞えばいいか手ほどきを受けた。怜子はそのことをずっと考えて計画していたらしく、説明は淀みなくつづき、短時間で終了した。

「じゃあ、そのとおりにお願いね」

怜子は念を押した。

志郎は妙なことになったと思った。

その怜子の相手である御曹司が家を訪れたのはそれからしばらくしてのことである。

怜子は冷淡にも、かれを出迎えることはなかった。

ただ、家の中に響いたチャイムで、来客のあることを知っただけであった。

やがて、怜子の部屋の扉がノックされ、かれの来たことを母親が告げた。

「入って頂戴」と怜子は云った。

扉が開けられて、中へと入ってきた男は、そこに志郎がいることを見てとって、はっとした表情をした。そして、にわかに表情を曇らせて、怜子に云いよった。

「そいつは誰だ？ 親戚というには似てないけど――」

「わたしのあたらしい彼氏よ」

「なに？」

志郎は焦っている男の姿を目に映した。青系のシャツに茶系のスラックスと云う服装だった。ごついブランド物の腕時計がシャツの袖から覗いている。首には金のネックレスがひとすじ光っていて、お金の掛かっていることがわかる。髪の毛は黒いままだったが、しかし、若干の黄みを帯びているのは、染めているのか、それとも地毛なのか、簡単には判別できない。

志郎は立って云った。「柿崎志郎と云います。怜子さんはあなたを離れ、わたしのもとに来ました」怜子の要望どおりの、きっぱりした宣言だった。

決着

「本気なのか、怜子？」男——かれは名を龍一郎といった——が怜子の方を見て告げる。

「あなた、わたしのほかに何人もの相手と付き合ってたんでしょ？もうわたしはあなたのことを見ているわけにはいかない、こうして、志郎さんと一緒にこれからの人生を考えることにしたんです」

怜子の演技は迫真のものであった。

龍一郎は彼女が真剣にそう考えているのだと思えないらしく、なおも、へらっと笑いながら告げた。「おまえがおれから離れるわけないだろう？　なにかの間違いだ。間違いに違いない。こんな男のどこがいいんだ？　こんな冴えない坊主にうつつを抜かしているとでもいうのか？」

志郎はむっとした。龍一郎の云い方にはとげがあったからである。「こんな男っていうけど、おれもひとりの男なんですよ。怜子さんを愛する資格はおれにもあるはずですよ」

「黙れ」龍一郎は取り乱した。「怜子、嘘だろ？　怜子」

志郎は怜子の方を見た。彼女は微妙な表情をしていた。志郎にはその表情がどういう心理のもとにあるものなのか、判別することはできなかった。

「悪いわね。わたしは志郎さんとこれからの人生を考えていく、そう考えてるの」

怜子はなおも云い募った。

「ふん、好きすればいい、もういいよ、おまえみたいな女はこっちから願い下げだ。もう会うこともないだろう、それじゃあな」

龍一郎はそう云うと、むっとした表情をそのままに、部屋を出て行き、扉をバンと閉めた。

怜子は志郎の方を向くと、ほーっと息をついた。

「ありがとう、あなたのお陰で修羅場がそれほど難しくなくクリア

できたわ」

「でも、どうしてこんなことを……」志郎は怜子に問いかけた。

「うん、あの人は気位のある人だから、一度、不利益を被ったら、もうそこにはかかずらあわないはず。志郎くんがいてくれて助かったわ」

「力になれたことは嬉しいですよ」

「うん、ありがとう」

怜子はそう云うと、再び部屋をノックしてきた母親にカンタンに事情を説明した。

怜子の母親は意味がわからなかったようだった。龍一郎が来ているのに、ご近所さんとはいえ、別の男を部屋に上げていたこと。そして、龍一郎を怒らせて返したこと。そう云うことに対して彼女は叱責しているようだった。

怜子は飲み物の載った盆を受け取ると、扉を閉めて志郎に飲み物を取るように促した。

怜子はほーっと息をはく。「ほんとありがとう」

「いろいろこれから大変そうだね」志郎は云う。

「なんとかなるわよ」

「うん」

「どうせなら、またこの部屋に来ない？」怜子は志郎を誘った。

「それは……」志郎はためらった。「魅力的な申し出ではあるけど」

「なら、また来なよ。歓迎するから」

「うん」

志郎は怜子が自分を異性として見てくれていることを察した。

憧れだけだった気持ちだが、いま報われて、大きな成果を上げている。

なぜ、こういうことになったのか、その理屈がわからない。

ただ、成り行きに身を任せるのも、悪いものじゃないと云う気持ちだけが、志郎の心に漂っていたのである。

【志郎と怜子・了】

決着（後書き）

お読みくださりありがとうございました。

ご都合主義であったことはいなめません。

設定段階で、こういうストーリーにしまったのが反省点です。
また次回、がんばります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6178v/>

志郎と怜子

2011年8月8日13時29分発行